

学習院大学史料館 ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.29

開館 40 周年記念号

発行日 ● 平成27年(2015)9月24日

もくじ

ごあいさつ.....	1
名品続々！展出品解説.....	2~8
学習院大学史料館からのお知らせ.....	8

◎平成 27 年度学習院大学史料館開館 40 周年記念

「名品続々！一教科書を彩る学習院コレクション」展

ごあいさつ

学習院大学史料館は昭和 50 年(1975)の開館から、はや 40 年を迎えました。この間多くの展覧会と多種の講座を開催し、大勢の方々にご来館頂きました。当初の古文書だけの収蔵品でしたが、その後、皇族・華族・学習院関係のものを中心に考古資料、絵画、陶磁器、漆工品、染織品、金工品、写真資料、アジア関係資料、文芸関係品など多岐にわたり、かなりの数が揃うようになりました。これらは当館の活動にご理解を下さり、史料をご寄贈・ご寄託下さった所蔵者の方々のご厚意によるところが大変大きく、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。本当に有り難うございました。

そして当史料館では年に何度かテーマをフォーカスし、展示会を開催しておりますが、5 年の前の開館 35 周年記念の展示会と同様、今回 40 周年にもテーマをフォーカスせず、広く人気のあるものを厳選し、オールスター展示を行う企画を実施致します。史料館員の熱い思いのこもる展示会です。またこの展示に関連し、東京藝術大学佐藤道信教授をお招きし、第 78 回史料館講座「近代日本の彫刻」という講座を開催致します。

皆様には本展示会および講座を通じて、我々史料館の展示や活動を身近に感じて頂ければ幸いです。

(史料館長 上田隆穂)

名品続々！

一教科書を彩る学習院コレクション展

史料館では、平成 23 年に開館 35 周年記念として、館員が推薦する逸品を展示したコレクション展を開催し、好評を博しました。今回は 40 周年記念として、館員がそれぞれ収蔵品の中から、教科書で一度は目にしたことのある作品や人物に関連した資料を選び、公開するコレクション展を開催いたします。

学習院大学の史料館と言えば、真っ先に皇族や華族関係の資料が思い浮かぶかもしれませんが、それだけではありません。例えば、江戸時代の一揆に関する古文書や戦前の学習院の歴史教育のために使用されていた標本資料、更には、かつて学習院で教鞭をとっていた学者たちの遺愛品など、多岐にわたる資料を所蔵しております。そして、古文書・文学・歴史・美術工芸それぞれの分野に秀でた館員によって日々研究が成されているのです。

本展示会は、「学習院にこんなものがあったんだ！」という発見と同時に、「これ教科書で見たことがある！」ともう一度学ぶことを楽しんでいただけるような展覧会となっております。また、展示室外のタッチパネルでは、展示資料に関連したクイズにも挑戦していただけます。教科書を彩る学習院コレクション、ぜひご堪能下さい。

(助教 柳澤恵理子)

名品続々！ 教科書を彩る学習院コレクション



伝応神陵古墳出土水鳥埴輪

嘴峰と尾を欠損しているが、ほぼ完全な形の水鳥埴輪である。高さ42.8cm。器面はハケメ調整で、頸部から頭頂部にかけてユビナデを施す。大きさや類例などから、ガンカモ科の水鳥を模したものと考えられる。

昭和24年(1949)当時、「畿内某帝陵出土 水鳥埴輪」というラベルが添付されていたという。学習院では、明治20年(1887)頃から白鳥庫吉を中心に歴史地理標本の収集に着手しており、大正2年(1913)から『標本原簿』(歴史)への台帳登録が始まった。しかし、『標本原簿』(歴史)に本埴輪の記載がないことから、明治年間には学習院に収蔵され、国史などの教材に供されていたのであろう。

明治期、古墳から発見された遺物は陵墓治定の関係上、宮内省諸陵寮で処分することとされていた。そのため、明治22年(1889)に応神陵(誉田御廟山)古墳の周濠から出土した水鳥埴輪は、宮内省諸陵寮に帰属され、出土遺物が一括して東京帝室博物館に引き継がれたのは、明治45年(1912)になってからであった。「畿内某帝陵出土 水鳥埴輪」が、学習院の歴史標本となり得たのには、明治38年(1905)第9代院長に就任し、その後宮内省諸陵頭や宮中顧問官を歴任した、山口銳之助の関与が示唆される。

華族子女の教育機関として逸早く歴史教育の必要性を認識し、宮内省所轄の官立学校であった学習院を象徴する標本といえよう。

茨城県立木貝塚出土 深鉢形土器(模型)

口唇部に刻目を有する波状口縁の深鉢形土器で、体部全体に縄文を施した後、ヘラを用いて区画線を描き、区画外を磨り消す磨消縄文の手法がみられる。高さ29.3cm。ドルメン教材研究所が昭和25年(1950)頃に製作及び販売していた『古代土器複製標本』第二集(後期・晩期縄文式土器)のうち、縄文時代後期の加曾利BⅡ式の標本模型である。当時中等科長であった児玉幸多により、第一集(弥生式土器)と第二集が購入され、阿方式甕形土器を除く12点が現存する。

標本模型の原型は、益子焼の陶芸家、濱田庄司が手掛けたもので、製作にあたっては、実物資料の精緻な観察や、山内清男ら縄文土器研究者の助言があった。そのため、粘土の調合にはじまり、輪積成形、磨消縄文の手法など、縄文土器研究で解明されていた製作方法を忠実に再現している。焼成温度が高く、肌触りが実際の縄文土器とは異なるが、標本の悪用を防ぐため、焼成前の底部に窯印「D」が押印された。

ドルメン教材研究所は、戦後、学校教育に考古学が必要と考えていた藤森栄一によって設立されたもので、杉原荘介や後藤守一、芹澤長介ら、明治大学考古学研究室を中心に、その趣意に賛同した多くの考古学者が参画している。そして、濱田庄司や島岡達三ら、益子焼の陶工の技により、実物資料と見紛うばかりの標本が完成した。

戦後、学校教育における考古資料教材を理解する上で第一級の標本である。(東京都教育委員会 平田 健)



昭和25年頃
ドルメン教材研究所製作

辻邦生と『西行花伝』

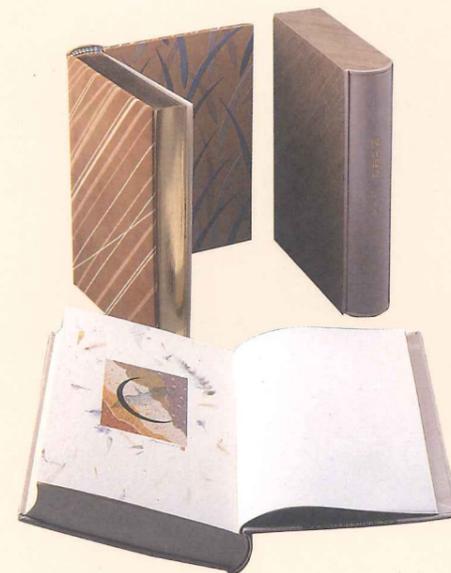
『背教者ユリアヌス』や『春の戴冠』などの長篇歴史小説を得意とした作家・辻邦生(1925-1999)は創作活動の一方、昭和31年(1956)より約35年間学習院大学フランス文学科(現フランス語圏文化学科)で教鞭を執った。当館では自筆原稿、創作ノート、日記など約4万点を所蔵している。

以下の資料は辻が晩年に発表した『西行花伝』の稀少本である。同作は平成7年(1995)に第31回谷崎潤一郎賞を受賞しベストセラーとなった。西行(1118-1190)が蹴鞠に興じる場面は殊に評価が高く、その精確かつあざやかな描写は井上ひさし、丸谷才一らも賞賛している。



1972年パリにて

私家本『西行花伝』(装幀:柄澤齊、製本:大家利夫 鹿燻革表紙 仔牛革モザイク見返し装、口絵(木口木版画) 限定5部)



撮影：上野則宏、写真提供：栃木県立美術館

装幀の柄澤齊(1950-)は木口木版画の第一人者。細密で時空間や生命の広がりを感じさせる作品は版画のみならずコラージュやオブジェ、絵画など多岐にわたり高い評価を得ている。また、『ロンド』『黒富士』など小説家としても活躍する。

製本の大家利夫(1949-)はフランスで修業を積んだ製本家。レリユール(フランス伝統の製本技術)を習得した世界でも稀有な存在である。近年ではロサンゼルスカウンティ美術館(LACMA)で個展が開かれた。

表紙は、蹴鞠にも用いられる燻革(藁と松ヤニの煙でいぶして、茶褐色にした鹿革)。印傳屋上原勇七が制作。白い縞模様は、革に糸を巻きつけ燻べる作業を7~8回繰り返すことによって浮かび上がるもので、素朴な風合いにふりそそぐ光のコントラストが華やか。表紙裏の植物は、三色の革を重ね合わせたモザイク技法を用いており、同じ厚みの革を縁がびたりと合うように並べてはめこんでいく作業は熟練した技を要する。三方金(三方の小口に貼られた金箔)は、高度な技術を誇る本場フランスの職人の手による。金箔を瑪瑙で何度も磨きをかけてことで艶やかで深い光沢を出している。

特製のシューミーズ(本をくるんで保護するジャケット)と外函は、しなやかな仔牛革と染付の桐紙が用いられ、内側には波の文様が刷られている。

全行程は手作業のため2つとして同じものはなく、函は一点一点に合わせてミリ単位で調整したオートクチュールである。

口絵は色版重ね刷りの王朝継ぎ紙風で、花々が漉き込まれた地のコットン紙に彩を加えている。月と羽ばたく鳥が両面刷りされており、西行の魂が鳥となって飛び立とうとする一瞬が切り取られている。私家本『西行花伝』は西洋の技法と日本の伝統的な素材や色彩が見事に融合し、単なる書物の域を超えた“珠玉の芸術作品”となっている。(学芸員 富田ゆり)

コラム 蹴鞠と鞠

蹴鞠は、平安時代末から鎌倉時代にかけて現代に伝わる「蹴鞠」としての形が整えられました。西行が仕えた鳥羽天皇の時期には大納言藤原成通という鞠の名手が現れ、千日鞠を成就したと伝えられます。鞠は、円形に裁断された2枚の鹿革のバックスキンを、馬の背革で縫合したものです。縫合の後、小穴から大麦の粒を詰めて球状に膨らませて整形し、表面を鉛白で化粧を施した後、詰物を取り出し小穴を縫合します。中空の鞠は重さ100gから120g程です。蹴鞠は松・桜・柳・楓の式木が植栽された鞠場で、鴨のくちばしに似た鴨靴を履いた鞠足8人により、鞠の守護神を意味する「アリ」・「ヤア」・「オウ」の掛け声をかけながら行われます。

(非常勤講師 田中潤)



源氏物語図色紙「若菜上」一葉(十一葉のうち)(個人蔵)

笏と笏紙

笏しやくとは、儀式において東帯を着用する際に、威儀を整えるために右手に持つ細長い板のことである。中国では、コツと呼ばれる同様のものが、すでに周の時代（紀元前11世紀頃 - 紀元前256年）から用いられ、もともとは忘備のためおぼえがき覚書などを記したものであったという。日本では、コツの音が「骨」に通ずるとしてこれを嫌い、かわりに、板の長さが一尺（約30cm）であったことからシャク（笏）と呼ぶようになった。奈良時代の「養老令」では、五位以上の官人の笏は、中国の制度にならって象牙製とされたが、容易に入手できなかったため、平安時代の「延喜式」では、白木を用いることも許された。笏に使用する樹種は、イチイ、フクラ（モチノキ）、サクラの類いとされており、現在も天皇および皇太子の笏にはフクラを使用している。

当館が西園寺家より寄託されている史料群（「西園寺家文書」）には、江戸時代前期の西園寺家の当主で、大忠院こと実晴（1601-73）が自ら製作したものを含め、5本の笏が残されている。これらは、当主や家の関係者が使用したと思われる。

笏



西園寺実晴作
17世紀
西園寺家文書

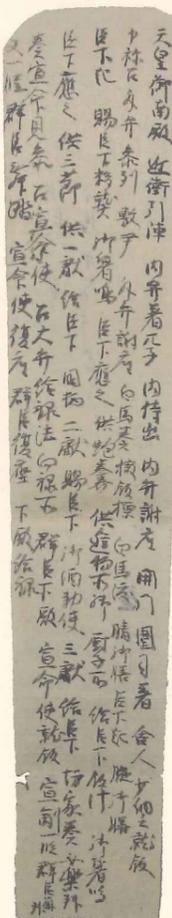
笏は、儀式のときに、その裏側に式の次第を書いた紙を貼りつけ、途中で見ることも用いられた。その紙を笏紙と呼ぶ。笏紙は、いわばカンニングペーパーである。ところが、儀式の途中に、笏紙を貼りつけた裏側を表側に出してしまい、笏紙丸見えの笏を気づかずに持って物笑いの種になった公家もいたという。

「西園寺家文書」には、笏紙も24点ある。そのなかで古いものは、戦国から江戸時代初期の当主西園寺実益（1560-1632、実晴の祖父）が、文禄4年（1595）に写した元日・白馬両節会の次第である。実益は、翌年正月、白馬の節会の内弁（責任者）を勤めており、その準備のために書写したことがわかる。

公家にとっては、諸々の儀式を間違えることなく円滑に進めることがきわめて大切なことであった。今にも通じるカンニングペーパー（笏紙）を時に眺め、儀式に臨んだ人々の心持を思うと、健気さを感じるの

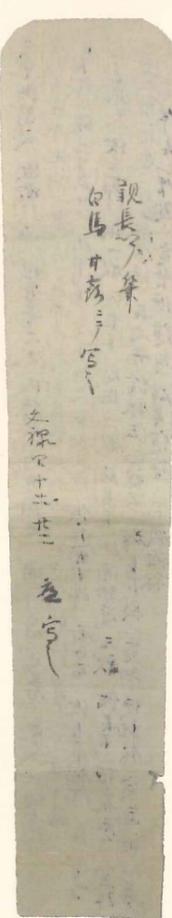
は私たちだけであろうか。
(客員研究員 徳仁親王・木村真美子)

笏紙（表）



西園寺実益筆
文禄4年（1595）
西園寺家文書

（裏）



武州世直し一揆

日本史の教科書によれば、江戸時代に起きた百姓一揆・打ちこわしは、3000件をこえると記述されている。江戸時代が「百姓一揆の時代」と言われる一因であろう。

当館では、慶応2年（1866）に起きた幕末期最大の「武州世直し一揆」の発生村である武蔵国秩父郡上名栗村（現埼玉県飯能市）の名主町田家史料を所蔵している。来年（平成28年）は、この武州世直し一揆の勃発から150年目の年にあたる。ここでは、名主町田家に残った武州一揆関連史料を紹介し、あらためてこの一揆について考えてみる機会としたい。

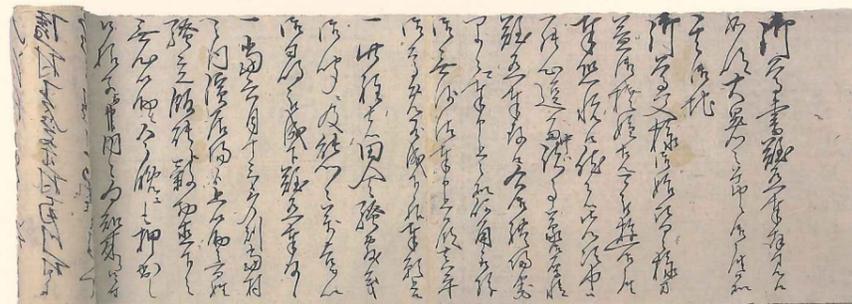
武州世直し一揆とは

慶応2年（1866）6月13日、上名栗村を発端として武蔵国一七郡・上野国二郡にまで波及した大規模な打ちこわしが起こった。民衆が「世直し」「世均し」を呼号して立ち上がり、各地で米の安売りや施金・施米、質地証文・借金証文の廃棄などを求めて闘った。鎮圧される19日までのわずか7日間のあいだに瞬間に関東各地に広がりを見せた、同時多発的、広域的に発生した一揆である。この事件は、発生地である上名栗村をはじめとする一揆の舞台となった村々にとって大事件であったことは言うまでもないが、江戸の近郊村で起きたそれまでに類を見ない大規模な一揆であり、幕藩体制に与えた衝撃は大きく、幕府の威信を揺るがす出来事であったといえる。



町田安之助宛 町田瀧之助差出書状

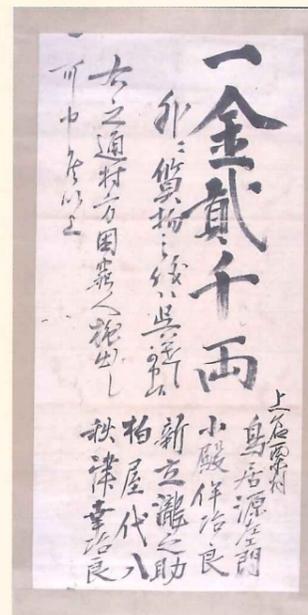
上名栗村名主町田瀧之助が、自身が体験した武州一揆の顛末を江戸深川で材木問屋を営む父安之助へ書き送ったもの。書状の長さは4m80cmにもおよぶ。一揆発生後間もない12日目に書かれた。まだ記憶が鮮烈なときに、一揆側との緊迫したやりとりなど当事者しか知りえない事実を、心情も交えながら詳細に記している。



慶応2年（1866）6月24日
町田家史料

金2千両を困窮者へ施金すると墨書した文書

一揆勢は、村役人が引き止めるのもきかず、飯能の質屋・穀物屋などを狙った。その際通過していく村々へ多額の施金を要求した。この墨書は、上名栗村の豪農が要求にこたえて金2千両の支払いと質物の帳消しを約束して掲げて見せたものと考えられる。最終的には、施金は千両を支払うことで決着した。
(学芸員 丸山美季)



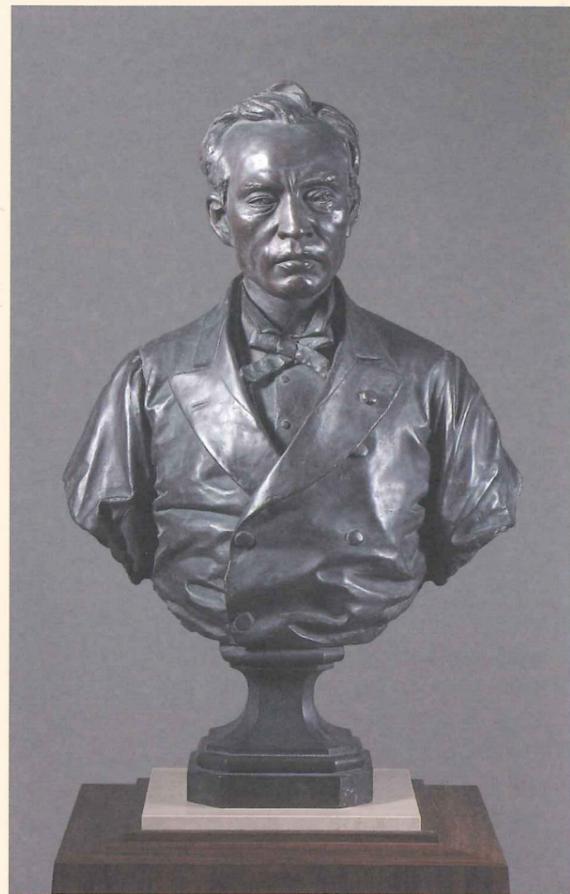
慶応2年（1866）
町田家史料

ラグーザ《山尾庸三像》

明治維新後、近代国家の確立を目指して殖産興業を推し進めてきた新政府は、欧米の最新の技術や学問を取り入れるため、多くの外国人指導者、いわゆる「お雇い外国人」を招き入れた。その一人であるイタリア人彫刻家、ヴィンチェンツォ・ラグーザ (1841-1927) は、明治9年 (1876) に開校された日本初の官立美術学校、工部美術学校で西洋の彫刻技術を指導した人物である。ひたすらに“写実描写”を重んじた彫刻技術を教え、自らも日本滞在中に多数の作品を制作した。

本像は、ラグーザが滞日中に制作した石膏像《山尾庸三像》(東京藝術大学所蔵)を昭和6年 (1931) に教え子の菊地鑄太郎 (1859-1945) がブロンズに鑄造したものである。山尾庸三 (1837-1917) は長州出身で、幕末期には高杉晋作らの攘夷運動に加わり、伊藤博文、井上馨らと共に英国へ密航留学をした人物としても知られている。新政府では工業技術の発展を訴えて工部省の設立に貢献し、現在の東京大学工学部の前身である工学寮 (のちの工部大学校) を設立した。

工部美術学校は工学寮の附属機関であった。つまり、ラグーザにとって山尾は日本に来ることとなったきつ



《山尾庸三像》 鑄造：昭和6年 (1931)
ブロンズ 個人蔵

かけを作った人物であり、大きな存在だったであろう。本像に見られる身体の厚みを感じさせる衣服の表現や、細部まで丁寧な彫られた顔貌表現は彼の写実技法を表す一方、洋装を着こなした凛とした佇まい、威厳に満ちた眼差しからは、政府官僚としての山尾をどこか理想化して表現しようとする姿勢が窺える。

平成12年 (2000)、東京藝術大学では、石膏の《山尾庸三像》が修復されるのに伴い、新たな《山尾庸三像》が鑄造された。本像と比べると、顔や衣服における皺がより忠実に再現されている点に注目される。この2体のブロンズ像からは、各時代における鑄造技術の様相を窺うことが出来、興味深い。

なお、本像には正面向かって左脇腹付近に「RAGUSA VINCENZO」という銘が、背面にはラグーザのプロフィールと共に、昭和6年に菊地が鑄造したことが記されている。併せてご覧頂きたい。

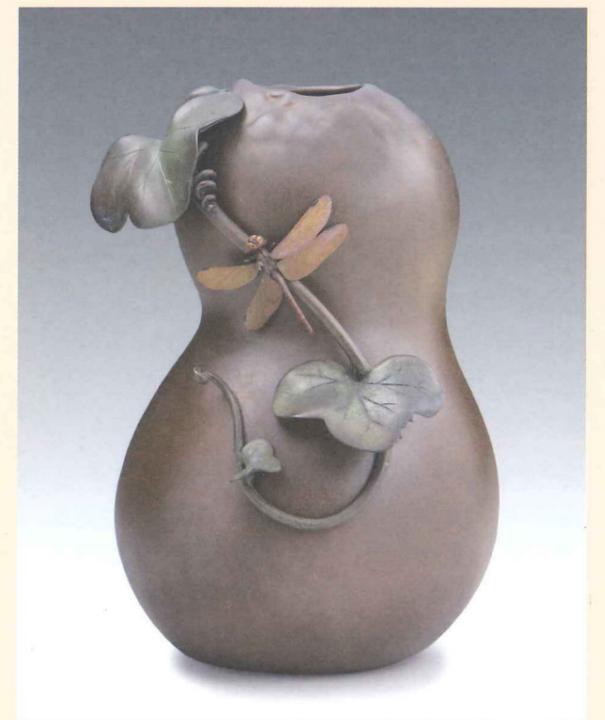
(助教 柳澤恵理子)

本山白雲《銅製瓢箪蜻蛉瓶》

瓢箪の実のふっくらとした丸みと質感の再現。緩やかに巻いた蔓にとまる蜻蛉は、触れれば飛び立つかという精巧さ。

この《銅製瓢箪蜻蛉瓶》は、昭和5年 (1930) 3月5日に、当時の皇太后 (大正天皇の皇后であった貞明皇后) から山階芳麿 (1900-1989) へ下賜されたものである。

《銅製瓢箪蜻蛉瓶》の胴の裏には「白雲」の銘がある。制作者の本山白雲 (1871-1952、本名：辰吉) は、土佐出身の彫塑家で、現在も桂浜に立つ坂本龍馬像や国会議事堂内の伊藤博文像をはじめ、幕末の志士や明治の元勳の銅像の原型を数多く作った人物である。宿毛山内家の家臣であった本山家に生まれた辰吉は、幼い頃から絵や物造りが巧みな少年であった。高等小学校までを宿毛で学んだ後、維新で家禄を失った家計を助けるため母校の代用教員となるが、明治21年 (1888) 彫刻家を目指して上京する。旧主の伊賀陽太郎や、北海道開拓の父と呼ばれ当時元老院議員となっていた岩村通俊など同郷出身者の援助を受け、彫刻の大家・高村光雲に弟子入りした。翌年には開校間もない東京美術学校に入学し木彫や鑄造技術を学んだ。この頃同校の教授となり帝室技芸員に任ぜられた光雲は、白雲の才能を高く評価していたと見られ、在学中の白雲を自宅に寄宿させ指導するほか、皇居外苑の楠公像 (楠正成像) や上野公園の西郷南州翁像 (西郷隆盛像) の原型制作に助手として携わらせ、自身の名から一字とった「白雲」の名も与えている。白雲は卒業後も、美術



《銅製瓢箪蜻蛉瓶》山階鳥類研究所より寄託

学校に新設された塑像科の教授・長沼守敬に西洋塑像技術の指導を受けるなど最新の技術を取り込みつつ、岩村通俊が企画した明治の元勳たちの銅像の原型制作を全面的に担当し、当時の元勳の銅像で彼の手にかからないものはないと言われるほどであった。昭和3年、白雲自身が紐を引いた桂浜の坂本龍馬像除幕式は、海軍総出で盛大に行われた。白雲作の銅製花瓶が皇太后から山階芳麿に下賜されたのはその2年後である。

本山白雲は文展や中央の美術団体には参加しなかったが、唯一参加した「土陽美術会」は土佐出身の美術家の集まりで、会頭に就任した田中光顕の援助により多くの作品制作や展覧会が開催されるようになった。第6代学習院長であった田中光顕は、明治31年から明治42年まで11年間に渡り宮内大臣を務めた人物であり、こうした人間関係が作品の制作や流通に影響したことも想像に難くない。

アジア・太平洋戦争中の金属供出により白雲が原型を制作した銅像の多くは失われ、それらの原型も戦時中に白雲自らが打ち砕き埋めたという逸話が残る。銅像以外の作例も少なく東京藝術大学や故郷の宿毛に数点が確認されるのみとなった現在、《銅製瓢箪蜻蛉瓶》は本山白雲の大変貴重な作例といえるだろう。

(学芸員 吉廣さやか)



本山白雲の代表作・桂浜の坂本龍馬像

恐れ入りますが、画像の閲覧を
ご希望の方は、ミュージアム・レター
本誌をご覧ください。

《山尾庸三像》 明治10-15年 (1877-82) 頃
石膏 東京藝術大学所蔵

西田幾多郎と鈴木大拙

日本を代表する哲学者である西田幾多郎(明治3年(1870)4月19日～昭和20年(1945)6月7日)と日本の禅文化を海外に広くしらしめた仏教学者である鈴木大拙(貞太郎)(明治3年10月18日～昭和41年7月12日)は、旧制第四高等中学校の同級生であり、ともに明治42年より旧制学習院の教授を務めた。

西田は1年間で学習院を去り京都帝国大学教授となるが、鈴木大拙は大正10年(1921)まで学習院に在職した。生活の場が離れても、同級生である二人の交友は終生続いた。

今回展示する資料は西田幾多郎死去の10日前の手紙と、西田幾多郎の死去を知らせる大拙の手紙である。いずれも哲学者柳田謙十郎(明治26年11月23日～昭和58年1月16日)に宛てられたものであり、柳田謙十郎の長女である柳田節子氏(元学習院大学教授)より受贈したものである。

(学芸員 長佐古美奈子)

学習院大学史料館からのお知らせ

平成27年度学習院大学史料館開館40周年記念

「名品続々!—教科書を彩る 学習院コレクション—」展

【主催】学習院大学史料館

【協力】霞会館

【会期・会場】

●平成27年10月3日(土)～12月5日(土)

月～土曜日 10:00～17:00

閉室 日曜日・祝日、10月16日(金)・10月17日(土)・

10月31日(土)～11月4日(水)

●北2号館1階 学習院大学史料館展示室

●入場無料

●ギャラリートーク

①10月24日(土) ②11月7日(土)

いずれも14:00～ 展示室内

【関連講座】

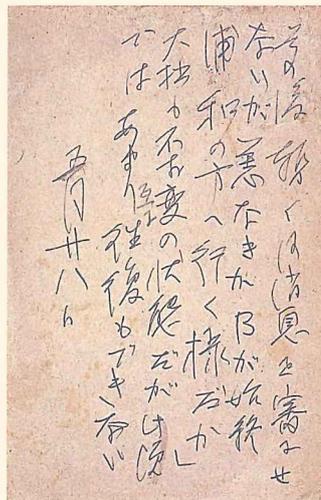
第78回学習院大学史料館講座「近代日本の彫刻」

日時:11月14日(土) 14:00～15:30

会場:学習院大学 中央教育研究棟 302

講師:佐藤 道信氏(東京藝術大学 教授)

*入場無料 事前申し込み不要

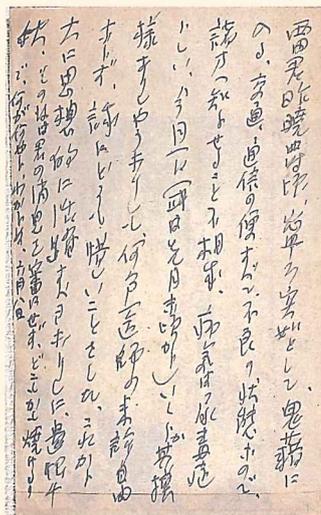


昭和20年5月28日 西田幾多郎→柳田謙十郎

西田幾多郎死去(昭和20年6月7日)の10日前に出された手紙。B29が浦和方面を攻撃していることを心配し、また大拙とも会えていない状況を嘆く。



西田幾多郎



昭和20年6月8日 鈴木大拙→柳田謙十郎

西田の突然の死に落胆、動揺する親友大拙の心情が窺える。



鈴木大拙

ミュージアム・レター第29号

2015年9月24日発行

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(3986)0221

内線 6569

FAX 03(5992)9219

Gakushuin University Museum of History

学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>

